

SANSEIDO'S  
NEW POCKET  
ENGLISH-JAPANESE  
DICTIONARY



SANSEIDO'S  
NEW POCKET  
ENGLISH-JAPANESE  
DICTIONARY  
最新明解英和辞典

三省堂編修所編

三 省 堂

昭和34年3月5日 第1刷発行



---

## 最新明解英和辞典

第47刷

編者 三省堂編修所

発行者 株式会社 三省堂 代表者 上野久徳

印刷者 株式会社 三省堂 八王子工場

発行所 株式会社 三省堂

〒101 東京都千代田区神田神保町1の1

電話 東京(03)293-3441(代)

振替口座 東京 6-54300

商標登録番号 378736

<明解英和・1,008 pp.>

2027

---

# 緒 言

## この辞典の歴史

明解英和辞典がはじめて出版されたのは1925年の春ですから、今から34年前のことです。初学者に親切で適切な辞典であったため、コンサイス英和辞典の姉妹辞典として、大正・昭和にわたり、学生諸君から非常な信頼と歓迎を受けてきました。その間、1939年と1950年に時勢の進歩に応ずるため改訂が施され、ますますその声価を高めて今日に及んでおります。初版以来この辞典によって英語を勉強した学生数は実に数百万に達するのであります。

## 最 新 版

世に英和辞典と称するものは多数あります。そしてそれらはいずれも、それぞれの特徴と使命とを持ってはいるはずであります。しかし学生の英和辞典として大切なことは、第一にわかり良いこと、第二には必要な語句が漏れなく盛られていること、そして第三には引き良いことです。明解英和辞典はこの最新版においてもこれらの大眼目をモットーとしていることに変わりはありません。

特に今回の改訂について特筆大書すべきことは、重要語にあっては、動詞であると、名詞であると、また形容詞であると、副詞であるとを問わず、初学者をわずらわすような変化形は、それが文法的には規則変化の部類に入れられるものでも、これをいちいち示し、その上それを見出語として掲げたことです。このように初学者に対して親切を尽した英和辞典は他に類がありません。

## 要 旨

従来の英語教育は「英書を読む」ことに重点が置かれ、「英語を書くこと、または話すこと」はとかく軽視されてきました。従って英和辞典も自然その方針に合うように作られ、書く立場・話す立場に立って英語を勉強するための注意や考慮がほとんど払われておりません。しかし今後の日本人はどうしても、単に英語を読むだけでなく、これを書き・話すことによって、世界の諸民族と触れ合い、これと協力して、世界の市民として自らの運命を開いて行かねばなりません。英語を学ぼうとする人々はまずこの見地に立って勉強する必要があります。

英語を書きまた話すための、すなわち英語で自分を表現するための勉強は単に英語を読むだけの勉強に比べて注意のしかたをいっそう細かくし、また観察力を鋭敏に働かせなくてはなりません。



ん。本書は本来が英和辞典でありますから、与えられた英文をいかに訳すかという問題を解決する道具であることはむろんでありますが、ただそれだけにとどまらず英語を完全に理解して真に自分のものとし、そして英語で自分の考えや心持を表現できるように英語を勉強するにはその各語についてどういう点をどう注意して観察すればよいか、そういう英語の学習上きわめて大切なことの説明をたくさん施してあります。読者諸君の中にはことによるとその説明を余計なことに思ったり、またむずかしくてめんどろくさいと思う人もあるかもしれませんが、日本で英語を勉強して英語を身につけるとしたら、こうするよりほかに良い道はないのです。本書に書いてあるこのような注意や説明が初めから全部わかる人はないでしょう。しかし本書を用いているうちにだんだんにそれが理解され、従って諸君の正確な知識がしだいに拡大されて、三年五年と勉強を積むうちに驚くべき力が皆さんについてきましょう。

### 訳語と用例のこと

一般に英和辞典は一つの語を扱うのに、まず訳語として何かその英語の意味に「似た日本語」を与えるのですが、諸君が辞書を用いるとき、実は最も警戒しなければならないことは、専門語を除けば多くの場合訳語は単に原語に「似た意味」を持つだけで、「真の意味」を伝えるものではないということです。英語と日本語のように非常にかげ離れた言語の間では、英語の単語や句とその訳語との間には意味の食違いがきわめて多いので、訳語は原語と等価であると盲信することは非常に危険であります。

卑近な実例をあげてこのことを明らかにすれば、だれでも一応は知っていると思っっているような come という語と go という語では、普通日本人は頭の中で come=来る, go=行く, という等式を作っており、語義をそのように理解しているのであります。この等式を単純に信じている者には、この知っていると思っっている語が案外役に立たないのみならず、使えばとんだ失敗さえも起すのであります。これも訳語の盲信のむくいであります。come の根本の意味は一言にして言えば「ある所・結果に、または相手の方へ向かって近よる・到達する」で、go の根本の意味は「ある所・状態から他の所・状態へ去る」ということです。従って正しい英語では「ここへいらっしゃい」と人を呼ぶときは *Come here.* であり、呼ばれたのに答えて「今行くところです」という意味を表わすには *I am just coming.* と言わなくてはなりません。それなのに、行く =go の等式を信じている者は *I am going.* という返事をするでしょう。これは大変で呼ぶ人の所へ行くのではなく

「他の所へ去って行く」という意味で反対のことになってしまうのであります。「お目にかかりに行く」は *I'll come and see you.* で、もしそれを *I'll go and see you.* と言ったら相手の人はきつねにつままれたような気になるに違いありません。「学校から家に帰る」は、学校にいて先生や友人に言うなら *go home* で、電話などで家の人に向かって言うなら *come home* でなくてはなりません。また *come* と *go* の作る慣用句がたくさんありますがたとえば *come to the South* (あなたのおられる南部へ行く、または来る), *go South* (南部へ行く), *come true* (ほんとうのことになる), *go wrong* (悪くなる) なども上記の語義が真にわかっていないとその意味がすっきりと胸に落ち着かないでしょう。

それではどうしたら英語の真の意味を捕えうるのでしょうか。諸君の勉強の成否は実はこの問題の解決のしかたにかかっているのです。辞書の良し悪しもまたこの問題の解決のしかたにかかっていると云えましょう。さて訳語でこの問題が解決できないとしたら、辞書としてはどうすべきでしょうか。それは

- a) 訳語を与えずに原義を説明すること。
- b) 訳語を使用してさらに訳語に註をつけて、訳語の不備を補いまた原義との食違いを訂正すること。
- c) 原義を巧みに例示するような例文によって原義を正しく推知できるようにすること。
- d) 図や絵で示しうるものはこれで示すこと。

であって辞書としてはこれ以上のことはできません。本辞典は主として (b) と (c) の方法によって語義及び用法の解明につとめるという新しい方法を取ったのであります。絵図は紙面が許さないので省略せざるを得ませんでした。なかでも用例はきわめて大切であって、そもそも人が自国語を習得するには、母の乳房をふくむ時から何年も何年もかかり実際の生活場面において無数の用例に出会い、そういうことを何べんとなく繰り返して意味をさとり、また自らも自分の意味を人に伝えつつその言語を習得するのであります。辞書にあってはかかる無数の用例を編者が学問的に調査整理して代表的なものを採録するのであります。

なお一つ大切なことは語義は往々微妙なもので、たとえば *big*, *large*, *great* を比べてみれば知れるように、同じようでもまた各々違った持味を持っています。書いたり話したりするためにはこういう類語の区別もある程度必要でありますから、本書はこういう点にも注意して解説をしてあります。これらの点の解明には説明も大切であります、用例が非常に必要であります。

本書における語義用法の解明のしかたに関する詳細はさらに「本書の使い方」の所で述べます。

### 発音のこと

英音と米音とを示しました。英音は国際音声学協会 (IPA) の定めた表音記号を用いていわゆるジョーンズ式の表記を行い、米音はケニャン、ノット氏らの発音辞典に準拠して等しく IPA の表音記号を用いて表記しました。なお初学者のために英音には仮名書きの発音をも示しました。

仮名で英語の音を正確に表記することはできないことですが、仮名の用い方に多少の制限とくふうを加えて幾分でもより正確な表記をするようにつとめました。IPA の表音記号及び仮名の使い方は別表に示してあります。

### 口語の尊重

英語教育が日本においては特に「読むこと」に重点が置かれていたことは前に述べた通りであります。読むことに重点を置くことはとかく文語尊重の風をもたらします。しかし文語は言語の成立の上から言えば口語が基礎となり、その上に建てられたものであって、口語を真に理解できないと文語をよく理解することはできません。英米人は英語は自国語であるから、学校にはいって文語を習う前に、口語を自然に覚えているのであります。つまり基礎になる口語を知った上で文語を習得するのであります。日本の英語教育では従来口語は軽視され、勉強が文語の習得に集注されて来ました。しかしこれは以前の日本の国情や風潮がしからしめたものであって、今日は昔の風をそのまま行う時ではありません。今後の我々はもっともっと口語の習得に心を用いなければなりません。それは単に成立の上から言って口語が基礎的なものであるという理由ばかりでなく、民主的社会では民衆の言語である口語が尊重され、そしてその使用が強調されるからであります。今日は商業上の文書、公文書に到るまで広く口語が用いられるようになってきました。

従って本書では口語の用法、文語との差異などにも注意を払って、そのおもなことは示すようにしました。しかし遺憾ながら、いずれの国語についても、口語の研究にはまだあまり学者が手をつけておりません。この点に関して本書に記載したことは、多くは編者が今までに実際に当って調べたことで、従って十分ということとは決して言えませんが、幾分でも新時代の学生諸君の参考になることを念願する次第であります。

### 米語のこと

米国と英国とでは発音のみならず、ことばの意味用法に相当差

があります——もっともこの差は近年だんだん縮まる傾向にあります。これは特に平俗 (colloquial) なことばに多いのであります。今後の日米関係のことや米語の世界的影響のますます拡大して行くことを思い、本書では米語的意味用法には相当重点を置いて取り扱いました。しかし英国の英語を軽視するということはいたしません。米英で語義用法を異にするものはなるべくその差異を示しました。

### 本書の語数のこと

今度の改訂では高等学校程度の英語を漏れなくカバーするよう語彙(Ⓒ)を拡大しました。その結果約 100 ページほどページ数も増えています。重要語約三千には \* 印を付してありますが、これはやはり L. Faucett, Harold E. Palmer, E. L. Thorndike, M. P. West の諸氏及び英語教授研究所などの調査発表に基き、特に日本の特殊事情を加味して軽重を定めたものであります。

### 結 語 と 感 謝

以上が本書のかいつまんだ特色であります。紙面の制約と学習者(中学及び高等学校生徒)の学力程度とを考えながら、ともかくも新時代の英語学習辞典とすることに苦心したつもりであります。まだ意に満たない点多々あります。また思わざる誤記遺漏誤植などがあるかもしれません。それは次の改訂の際に完全を期したいと思いますので、大方の御教示をお願いいたします。

本書の編修は平井四郎氏が担当し、多大な労苦と困難とを克服していま本書を世に送ることができるようになりました。同氏の労に対して深甚な感謝を捧げます。

なお、この最新版の前身をなす新訂版の編修にあたって英文の用例を校閲して下さった Dr. Robert H. Gerhard の御好意をここに再記して感謝をつづけなければなりません。しかしこの最新版では前記の通り約 100 ページの増補がなされたので、その分にもし誤記があるとしても、それに対して同博士にはなんの責任もありません。

1959年1月15日

三省堂編修所



## 本書の使い方

### 見出語

(1) 見出語に出したものは単語、合成語及び略語に限る。英語で合成語として扱うものでも米国では二語または数語から成る連語として扱うものが多い。たとえば英国で ice-cream, dining-room と書かれるものが米国では ice cream, dining room と書かれる。かかる場合は本書では米国の慣用に従い、これを連語として扱い訳語または用例のあとに太字で掲げた。

(2) つづり字法は米国の慣用を主としてその位置に配列し、あとに英国の慣用によるつづり字を付記した。たとえば米国の center を先に出し、英国の centre をあとに付記し、引くのは **center** の所で引くようにした。また米国の labor, 英国の labour のような語は **labor**, 関 **-bour** として **labor** の位置で引くようにした。

(3) 分綴(綴り)法は Webster's *New International Dictionary* (1956) により (・) 印で音節のさかいを示したが、音節のさかいにアクセント符号 (') がくる場合はこれで代用させてある。見出語のアクセント符号は主アクセントのみを示し、アクセントのある音節のあとに付した。ただし副アクセントのある場合は発音表記で示し、それぞれアクセントのある音節の母音の上に置いた。

例: **suit'case** [sju:tkèis スュートケイス/sú:t-]

### 発音

(1) 本書の発音表記は英国音を主とし、英国音と米国音の差異を示す必要のあるときは斜線 (/) で分け、左側に英国音を右側に米国音を示してある。この場合米国音は英国音と異なる部分のみを示し、英米共通の部分は省略してハイフン (-) で示してある。

(2) 発音記号の中で斜体になっている音は省略してもよいことを示し、たとえば **sta'tion** [stéiʃən ステイション] とあるのは [stéiʃən] とも [stéiʃn] とも発音されることを示している。

(3) **car·a·van'** [kærəvæn キャラヴァン, ーー] に見られるように変種の発音がありその発音記号が全く同じで、アクセントの位置のみ異なる場合は、各音節を短いダッシュで代表し、その上にアクセントの来る位置を示してある。上の例は [kærəvæn] のほかに [káerəvæn] とも発音されることを示している。

(4) 発音表記中(また 関, また 関)と記してあるのは、その前に記してある発音のほかにさらに米国だけでまたは英国だけで発音される音を示したものである(例: **ad·dress'** [ædrés アドゥレス, また 関 éadres])。)

### 訳語

(1) 語義の分類 語義は品詞別に訳語をもって示し、訳語のないものは語義または用法を説明した。一語に数義あるものは便宜上これを分類して **1, 2,**

3...のごとく番号で分け、さらに 1, 2, 3... 中で語義の細分されるものは a, b, c...のごとく分けて記した場合と単にセミコロン (;) またはコンマ (,) で区別した場合とある。セミコロンで分けた場合は語義に相当の開きがあり、コンマで分けた場合は語義の開きが軽妙な場合である。

(2) 補註 訳語はこれを厳正に扱い原義に最も近い日本語にした。しかし緒言で述べたとおり、英語と日本語の間では厳密に言うとの確な訳語はない場合が多いので、原義と訳語との誤差を修正または補足するために『 』でくって補註を多く加えた。補註は往々類語との区別を念頭において加えたものもあり、読者が一見何のために補註を加えたか気づきたいようなこともあるだろうが、それらは多く上のような場合であろう。初学者の中には補註の意味が難解でかえってじゃまにさえ思う者があるかと思うが、それはまだその人の学力が未熟なためで、勉強が進むにつれてその重要さが理解できるようになるだろうから、かような人は力の進むまでしいて補註にこだわる必要はない。

(3) 語の共義関係 語義は dog とか water とかのように、その語自体で特定の意味内容を持つもの(自義的の語)と、is (動詞), in (前置詞), which (関係代名詞), tell (動詞)などのように、それ自体特定の意味内容を持たないか、またある意味はあってもそれ自体では意味を完結しないもの(共義的の語)とがある。この共義関係は単に訳語だけではこれを明らかにすることができない。従って本書では必要に応じ、しばしば訳語とともに共義関係に立つものを〔 〕または『 』の中に補って語義用法を説明してある。〔 〕中では多く主語や目的語を具体的に与え、『 』中では補註的につまり抽象的に共義関係を示した (accept, acknowledge など参照)。

(4) 代替, 言い換え, 省略, 補充 連語や用例などでは、往々その一部を他の語に替えることや、同じような意味で他のことばに言い換えることや、またある語を省略できることを示し、またさらにしばしば訳文中では訳文の意味をいっそう明らかにするために別な訳を補充添加して、それらを ( ) の中に入れた。たとえば, She is in (=wearing) a pair of trousers.

(現に)着ている。

では、今現に着ている意味では is in または is wearing という言い方が用いられ、常々着用する (wear) という常習的行為と着る (put on) という瞬間的動作と英語ではことばを分けていることを暗に示している。

There is plenty of wear in it.

それはまだ十分着られる(用いられる)。

では wear は着物のみならず広く道具などについても言いうることを補足的に説明している。

You are welcome. どういたしまして(お礼には及びません)。

では「どういたしまして」という日本語の慣用句がこの英語の慣用句に一致するがただしそれはお礼には及びませんという意味でいうときに一致することを示している。

(Please) Wait a minute. ちょっとお待ちください。

I woke (up) early this morning. けさは早く目がさめた。

などでは、please や up は省略することもできることを示す。

wake suspicion (desire, passions)

疑惑(欲, 激情)を振り起す。

では、wake はその目的語に suspicion のみならず、desire, passions などの語をも取ることを示す。

(5) たとえば **heaven** や **out** ㊦ の項で見られるような訳語の前にある (H-), (the ~s) などの表示は、それぞれ Heaven, the outs としてその語義を持つ場合の形を示したものである。

(6) **注意事項** ある語の用法につき特に注意の必要のある場合には【注意】として、または単に【 】の中にはさんで説明を与えた。

## 用 例

(1) 語義を知るには、まず用例を調べ次に訳語を参照するのがほんとうの態度であるが、この辞典では全部の語、全部の語義に対していちいち用例を与えることが紙面の上からできないので、多くは共義関係の複雑したものあるいは訳語や補註だけでは意味用法がしっくり理解しにくいもの約 5,000 語に用例を与えてこれを明らかにした。これら 5,000 語は最も英語の特性を現わす語であると同時に英語の根幹をなす語であり、この辞書を引くたびに用例に注意して、これらを真に理解し得たならば諸君の英語の実力は驚嘆すべきものとなるであろう。

用例は原則として訳語の最後に ㊦ 印を付しそこに一括して、番号によって分類した語義と引合せのできるようにしてある。

(2) 用例中慣用連語と見なされるものは太字で示してある。

(3) 用例の訳文は特に直訳を避け、その場合の文意に徹した意識を与えた。従ってまず用例の文意に徹し、しかる後に分類された語義と対照吟味してその語の真の意味を用法形式とともに理解するように努められることが望ましい。

ただ特に注意すべきことは、英語には日本語のように特に女性の用いることばまたは男性の用いることばというものほとんどなく、また敬語なども日本語のように多く用いない。従って訳文に現われたこのような日本語の形式についてはこの点に注意してよく英語の形式と比較して、その異同をさとらなければならない。

## 連 語 (Collocations)

(1) 数語が集まって一つのかたまりとなり、慣用上特殊の意味を持つものを連語という。本書では訳語のあとに(用例を掲げた場合は用例のあとに) || 印を付し以下に連語を a b c 順に掲げて、その意味を示してある。連語に対して用例を与えた場合は、その用例は ( ) の中に入れてある。

(2) 連語をいかなる見出語のもとに配置するかについては明確な原理を立て得ないうらみがあるが、大体その連語の意味に中心的役割を尽していると思われるような語を取って、その語のもとに連語を配置した。従ってそのような中心的役割をなす語が一見見分けがたい場合には連語を二か所に出すようにした。

## 語形変化

(1) 動詞, 形容詞, 副詞, 名詞それぞれの不規則変化形は見出語の発音のあとへ ( ) で包み太活字で示してある。たとえば

**fore-see'** [fɔ:sí: フォーサー], ㊦ (過去 **foresaw**; 過分 **foreseen**)

**fore-tell'** [fɔ:tél フォーテる], ㊦ (過去・過分 **foretold**)

\***good** [gud グッド], ㊦ (比 **better**; 最 **best**)

\***man** [mæn マン], ㊦ (複 **men**)

とあるのは動詞 foresee の過去形が foresaw, 過去分詞形が foreseen; foretell の過去形及び過去分詞形が foretold; 形容詞 good の比較級が better, 最上級が best; 名詞 man の複数形が men となることを示している。

(2) 文法上は規則変化の中に属するものでも語尾の -y が -i になって変化するもの (例: fry; happy; reply), 語尾の -e が脱落して変化するもの (例: like<sup>1</sup>; rare), 語尾の子音字を重ねて変化するもの (例: stop; hot), また語尾が -f, -o で終る名詞 (例: knife; radio) の変化についてはこれを ( ) で包み細活字で示した。なお, travel の項に示してあるような (例 -ll-) は米国では traveled, traveling と変化し, 英国では travelled, travelling として用いられることを示したものである。

## 語または文のスタイル

(1) 専門用語は【動】【空】【語】などのように印し, それぞれ動物学用語, 航空用語, 語学用語などであることを示した (略語表参照)。

(2) 【米】は特に米国で用いられる語義または用法。

【英】は特に英国で用いられる語義または用法。

【俗】は平俗 (colloquial) なことばまたは用法。これは卑俗とか粗野という意味ではなく, くだけた日常語の意味である。

【雅】は雅語でことさら気品を示すもの。

【詩】は詩語で詩文にのみ用いられるもの。詩形に関するものは【詩】。

【隠】は隠語 (slang) で特殊な社会の人が特殊な目的で用いるもの。学術的・技芸的なものは専門語の部類に入れる。

【古】は古語で往々現代語の中に擬古的效果のために用いるもの。

(3) その他【反語】=ironical, 【文飾】=rhetorical, 【戯語】=jocular, 【公用語】=formal または official などの注意及びある用法が口語に限られる場合には【口語】などの注意を与えた (口語は常に平俗とは限らない。時に formal な口語もある)。

## 同形異語

pitch<sup>1</sup>, pitch<sup>2</sup> のように見出語を別に立てて, 右肩に小数字を付したものは, 同一つづりではあるが実は本来別語であることを示す。



## COUNTABLE と UNCOUNTABLE

本書では訳語の前にしばしば [C] や [U] または [U,C] の印が付してある。これは英文を書くときまたは英語で話すとき、名詞は複数形をとりうるか、単数形を用いるとき不定冠詞を付しうるか付し得えないかというようなことを示すのであるが、元来英語の名詞の単複関係は微妙複雑を極め、外国人ことに日本語のような単複にむとんちやくな言語になった我々日本人には常に悩みの種である。その複雑した関係は規則化して解明しがたいものである。これは辞典が取り上げて個々の語について明示すべきものである。ことにこの辞典のように書くことと話すことの勉強をも考えに入れた辞典としては採録した個々の語についていちいちこの関係を示すのが忠実なしかたである。

(1) dog や bird や house のような実在的なものでしかも一個の個体を形作っているもの、換言すれば一つ二つと数えられるようなものは単複の関係が明らかであるのに反し、water, air, flour, cloth のようなものはひとしく実在的なものでありながら、一個の個体としては考えられない、つまり一つ二つと数えることができない。およそ人間の意識にのぼるものは無数であり、実在的なものもまた非実在的なもの、すなわち関係・性質・情意などのようなものもある。英語では実在的なものとの間の単複関係が根本となって、これを移して非実在的なものにも適用されると言えるだろう。数えられるものを countable ([C]), 数えられないものを uncountable ([U]) と称することができる。

(2) しかし語というものは一語が常に一物をさすとは限らず、一語が種々の意味を表わすようにできあがっているため、名詞はその表わす意味により [C] になったり [U] になったりすることが多い。たとえば man という名詞は「男の人」の意味のときは [C] で、*a man, two men* などとなるが、「人類全般」の意味では [U] であるから、*Man is mortal.* (人間は一度は死ぬ) などと言う。また wine は全般的に「ぶどう酒というもの; 酒というもの」の意味のときは [U] で、*He never touches wine.* (あの人は酒を決して口にしない) などと言い、ポルドー酒だとか、ポートワインだとかまたシャンペン酒だとかぶどう酒の種類を表わすときは [C] であって、*France produces good wines.* (フランスでは良いぶどう酒ができる) などと言う。

(3) それならいかなる名詞もその意味により自由に [C] にも [U] にもなりうるかという、決してそうではない。news (情報, たより) や furniture (家具) のような名詞は常に [U] と定まっていて、幾つかの情報や何点かの家具を考えると *items (an item) of news* とか *pieces (a piece) of furniture* と言わなければならない。

*advice, word, wheat, grass, fern* などという語はこの点どうなのであろう。参考のため本辞典中のその各項を参照せよ。

(4) ある個体が [C] であることはわかったが、その個体の集合はどうなるのであろう。集合のしかたによってそれに種々の名前が生ずることは日本語も英語も変りはないが、その名前である語の単複はどうなるのであろう。これらの語の単複関係の

扱いは英語では複雑である。試みに *people, crowd, mob, committee, crew* あるいは *village, town, nation, world, mankind* などを引いて見よ。また *Japanese, French, English, American* などを比較して見よ。集合ということが訳語だけで明らかでないときは『集』と印して集合の名であることを示してある。

(5) 天地の間にただ一つしかないもの、たとえば *the moon* (月) などのようなものは意味では ㊦ であるが数えるとすればただ一つと感ずるだけで従って複数形は不要なはずである。かかるものは ㊦ 圍として示し、また場合によっては (*the ~*) または他の方法でその関係を明示した。しかし *moon* は地球や太陽に対して考えるときは *the moon* であるが、その月のある時の形相を表わすときは *We are going to have a (new, full) moon this evening.* (今晚は月(新月, 満月)が出る) というように ㊦ である。また信州の田ごとの月(実は月のようなもの)でも見たときは *What a lot of moons!* (なんてたくさんの月だろう!) という表現もできる。

(6) *Sunday* や *Christmas* のような語は大文字で書かれ、普通冠詞もなく単数形で用いられるが、*Closed on Sundays.* (毎日曜休業), *I had many Christmases this year.* (今年はクリスマスのお祝を方々でやった、つまり自分の家でもしたし、友人の家へ行ってもしたし、また学校へ行ってもしたなど) というように明らかに ㊦ としての用法もある。*August* のような月の名、*winter* のような季節の名も同様に ㊦ でありながら普通は固有名詞のような形で用いられている。

(7) 遊戯やスポーツの名は原則として ㊦ で *play tennis (baseball)* というように言うが *billiards* (玉突き), *checkers* (チェッカー), *ninepins* (九柱戯) のように複数形のものもある。しかしこれとても意味から言えば ㊦ で、従って *Billiards is played in Japan.* と動詞は単数形を用いる。これらの名称である名詞の文法的扱いは例外なしに ㊦ であるから、印を省略した。

病気名も一般的には ㊦ であるが *cold* (風邪(㊦)) や *headache* (頭痛) は ㊦ である。従って *He is in bed with pneumonia.* (あの人は肺炎で寝ている), *Measles is prevalent now.* (今はしかが流行している) などというが、*I have a cold.* (私は風邪を引いている), *Colds are prevalent in winter.* (風邪は冬に多い) などという。㊦ になるものは印してある。

(8) 抽象名詞や物質名詞がその本来の意味で複数形をとったり、不定冠詞をとったりすることは理論上許されないことである。しかしこれも違った意味に用いられると ㊦ になる。*truth* は真実性、誠実さを意味するときは ㊦ で、*There is no truth in her statements.* (彼女の言うことには真実性がない—それは事実と違う) とか、*I doubt her truth.* (彼女の誠実を疑う) とか言うが、ある真理を意味するときは ㊦ で *the great truths of science* (偉大な科学上の真理) という風に言う。*improvement* は改善という状態の変化または操作を意味するときは ㊦ で *There is need for improvement in your English.* (君の英語はもっとみがく必要がある) など

となり、改善の結果とか事例とかを意味するときは [C] で、This revision is a great improvement. (この改訂版は非常な改善だ)、また All the improvements have been financed by the government. (諸般の改善はすべて政府から金が出た) などと言える。

思うにこれらの語が [U] であるときは一般化されたもの—特殊性を考えに入れないうもの—を表わし、[C] として用いられるときは大なり小なり特殊性とか具象性が考えられていることを示すのであって、[U] の形に an act (行為) of, a fact (事実) of, an instance (事例) of, a result (結果) of を前置したのと同様の意味を持つと考えてよいのである。しかし日本語にはこのような意味内容の差を表わす形式が発達していないので、適訳を施すことができない場合が非常に多いので、本書ではしばしば [UC] と印して訳語の不備を補ってある。aggression, persecution などはその例である。

sound (音) や light (光) のような現象を表わす語の [UC] 関係もこれを区別する訳語がない。しいて言えば sound の [U] は種類を問わず一般に「音というもの」、light の [U] も同様に「光というもの」で、sound の [C] は「ある特殊な、具体的な音」、light の [C] も「ある特殊な、具体的な光」であろうが、これも簡略に [UC] と印して訳語は「音」「光」としてある。ただし light の [C] にはさらにその特殊なものとして「灯火」の意味もあり、これは日本語があるのだからそれを訳語としてのせてある。wind や rain などともこれと同類の語である。

抽象名詞や物質名詞が不定冠詞をとりまたは複数形をとる場合、完全に普通名詞化して [C] になったのだとは断言できないようなことが多い。たとえば、charm という語は (a) the charm of her eyes (彼女の目の魅力)、(b) Her eyes have a charm. (彼女の目は魅力がある)、(c) She never loses her charms. (彼女はなかなかあだばさを失わない) というように用いられる。(a) の charm は [U]、(b) (c) の charm は [C] だとして本書は取り扱ったが、それは形式の上からは (1) に述べた根本形式が準用されているのであるが、実際の意味を吟味してみると、この (b) (c) の charm は one charm, two charms と数えられる程個化されていない。そしてその意味は (b) では「ある」魅力、(c) では種々な点から来るある魅力的な性質の「複合」を暗示するにとどまる。ところが charm にはこのような意味で複数形が許されるが抽象名詞の knowledge などになると複数形はなく He has a good knowledge of English (彼は英語の知識が相当ある) とは言えるが good knowledges とは言わない。(古くは学問のことを knowledges と言った時代もある。)

同じようなことは物質名詞の場合にもある。川や湖や海のような水の「集積」はしばしば waters と複数形で表わされ、Crocodiles live in these waters. (この辺の水域にはわがいる) などの言い方が許される。同じ物質名詞の複数形でもこの場合は前記 wine の複数形とは意味が違う。一方は種類の「集合」、すなわち心の中で個化したものの「集合」で他方は個化しない物質の「集積」である。水にも泥水、澄んだ水、川の水、海の水、鉱泉の水、

軟水、硬水などいろいろの水が考えられる。しかし英語ではこれを a (kind of) water と考えないで a condition of water すなわち「水の状態」と考え、従って muddy water, clear water, …… という風に a をつけない、またこれらを引くくめて waters ということはしない。ただ鉱泉水、薬液など「物の溶液」を waters と呼ぶことがある。

そこでこのような語に対する [U] または [C] の印のつけ方は、knowledge のように不定冠詞はとるが複数になりえない抽象名詞は [U] としてこの関係を用例で示すかまたは (a ~) などとして示し、waters のように複数形はとるが通常 a water とならないものは [U] としてさらに [C] と印してこれを示すように努めた。

(9) 本来の英語(外来語でない)の動詞の不定詞 (to のない形) を名詞として用いることは英語に非常に多い。そうして -ing 形が [U] であるのに反しこの形は [C] に用いる傾向がきわめて強い。たとえば *Movements in dancing differ from those in walking.* (踊りの動作は歩く動作とは違う), *They had several dances.* (あの二人はいっしょに五六回踊った), *Let's go for a walk.* (散歩に行きましょう) など。dancing はある特定の踊りでなく一般に踊ること、種類のいかんを問わずいっさいの踊りをさすに反し、dance はある特定のものを念頭に描いた場合に言う。bathing は同様一般に水浴を意味し、[C] bathe は特定の、すなわちある場合にある形で実際に行う水浴を意味する。ちなみに [C] bath (風呂場での沐(り)浴) は bathe のさらに特殊な場合である。

clothing も [U] で人間の被服の総称であり、clothes (この単数形はない) はやはり [U] であるが、ある程度特殊化された着物の集合すなわち articles of clothing を言う。従って「人間の生活には着物がなくてはならない」というようなきわめて一般的な表現をするときは *Clothing is requisite for human life.* となり、「あの人は衣装持ちだ」というような場合は *She has plenty of clothes.* ということになる。ちなみに cloth は [U] で布地を意味する。この語はその意味では [C] は欠けていてそれを表わすに pieces (a piece) of cloth と言う。ただしテーブルクロスや布巾(きん)のように一定の形をして一定の用に用いるものは a cloth と [C] になる。なお、辞書を引いて wash, ride, push などを比較して見よ。

(10) 動植物名の [U] [C] 関係も一言述べる必要がある。たとえば beaver は動物名としては [C] であるが、その毛皮の意味では [U] である。rice は普通 [U] で米の意味にも稲の意味にもなる。従って「一本の稲」をさすときは a rice plant と言わなければならない。また an apple (りんご) は [C] でその実をさす。その木は [C] an apple tree と普通に言うが、分類的にその植物全般をさすときは [U] the apple となる。木材となる木は普通 mahogany のように [U] で質材をさし、個々の木をさすときは [C] a mahogany tree という。下等植物になると moss のように [U] であるが fern (しだ) のように [U][C] になるものもある。しかし germ (ばい菌) は [C] である。

(11) 名詞の中には擬声語といって物の声や音をまねたものが多くある。純粹



の擬声語は [U] になりがちで、擬声語的動詞から来た名詞 (-ing 形でない) は (9) の場合と同じ傾向を持つ。例: the [U] tick-tack of a clock (時計のかちかち), It for the first time said "[U] cock-a-doodle-do." (初めてこけここうと言った), I heard a [C] scream in the dark. (闇の中できゅっと叫ぶ声が出た), What made you let out such a [C] screech? (なんでおまえはあんなにきゅっと叫んだのだ)。

(12) あいさつのことば、たとえば Good morning, Goodbye, How do you do? などは普通間投詞に用いられ、その意味では [U] であるが、次のように用いると [C] である。a shower of goodbyes (いっせいのさよなら), He passed me without even saying a how-do-you-do. (彼は今日は一つ言うでもなく私の前を通過して行った)。

(13) 一般に普通名詞といわれるものが、前記あいさつ用語もそうであるが、呼びかけや敬称として用いられるときは意味が非常に違った性質のものに変っている。そして冠詞をとらない。普通名詞は countable な物を「類」として捕えてそれに命名しているのであるが、呼びかけ語や敬称はそうでなく感情を表わす道具として用いられている。ちょうど火事 (a fire) を見て Fire! Fire! と叫ぶときそれは冷やかな認識の対象でなく強い感情の対象として捕えられ、従って叫ぶ者は冠詞などを用いたくない心境にあるのと似ている。たとえば What's your name, young lady? (お嬢さん、お名前は?), Ah, you're a daughter of Mr. Smith. (ああ、スミスさんの娘さんですね) では young lady は呼びかけ語、Mr. は敬称でやはり単数形でも冠詞がない。こういう場合は形式的に見れば [U] だと見られる。ところが呼びかけ語や敬称でも Ladies and Gentlemen (紳士淑女諸君), Ladies and a Gentleman (聴衆中男が一人のときに戯れて), Dear Sirs (拝啓), Messrs. Smith Brothers (スミス兄弟商会御中) などのように数の意識を強く打ち出すときは [C] の形相をとる。

普通名詞が本来の意味を離れて感情的に用いられる場合は無数にあるのでこれをいちいち取り立てて、それに [U] や [C] を印して行くことはこの辞典ではとうていできないことであるから、読者諸君はこの説明をよく含んで実際の場合場合に当たってもらいたい。しかし著しい事例についてはこれを本書に記載した。

(14) 名詞が連語を作ると元来 [C] の名詞が [U] になることが多い。その場合には (a) 意味が変質して抽象名詞になるか、(b) 「ある一つの」という特定性を無視することになる。むずかしく言えば特殊が一般化されるのである。例:

- a) go to school 学校へ勉強に行く (ただし Father went to the [C] school to see the headmaster. おとうさんは校長に会いに学校へ行った); sit at table 食卓につく (ただし sit at the [C] table reading the papers テーブルに向かって腰掛けて新聞を読む)。  
 b) travel by train 汽車で旅行する (ただし I hate to travel on a packed train. 混(こ)んだ汽車で旅行するのは閉口だ); healthy in body and mind 心身共に健全 (ただし A healthy mind